

〈第8回国際日本学講演会（2024年5月11日）講演記録〉

「研究」と歩き回る —文学/思想を展示する—

姫路文学館・学芸員 徳重公美

ただいまご紹介いただきました徳重です。私は現在、兵庫県姫路市にある姫路文学館に学芸員として勤務しております。当館は、姫路を中心とした播磨ゆかりの作家や学者たちに関する資料を収集し、紹介する博物館施設で、私は展覧会の開催や資料整理などの業務に取り組んでいます。本日は「文学館」という施設ではたらく一学芸員の経験をお伝えすることで、みなさんの将来の可能性のひとつとして「文学館学芸員」を考えていただくきっかけになればいいなと、思っています。

1. 自己紹介 —学芸員になるまで

私は、「日本倫理思想史」なかでも荻生徂徠を中心とした近世日本の儒学思想を研究してきました。聖心女子大学へ入学後、哲学科が開講していた各種概論を履修するなかで同科への進級を決意。この時に受けていた授業に、哲学概論、美学概論、キリスト教学概論などがあり、それと並んで開講されていた初学者向けの授業に「日本倫理思想史」がありました。テキストには、和辻哲郎の『日本倫理思想史』が用いられていて、思想書や文学作品、美術、大衆文化、歴史や考古学資料を自由自在につなぎ（もちろん緻密な研究と分析によるのですけれども）、一つの大きな流れとして見渡せた気分になったことを楽しんでいました。この研究領域との個人的な出会いをさかのぼるならば、大学の初めの頃かなと思います。

その後、哲学科の先生方との出会いやゼミでの学びを通して、〈愛を分析・説明する〉という課

題に向き合い、日本思想という大きな括りのなかで宮沢賢治や鈴木大拙、柳田國男、本居宣長、親鸞などのテキストを読むようになりました。ぼんやりと卒論のテーマが定まらないまま、卒業単位を満たすためにあれこれとゼミに顔を出していたところ、美学を専門としておられた先生が授業で『論語』を読むと一言でくださったり、指導教官が儒教関連のテキストを演習のテキストに選んでくださったりして、いよいよ（つまり読み込むという意味で）「儒教」を学ぶようになりました。その中で、江戸時代に儒教研究において大きな功績を残した伊藤仁斎や荻生徂徠という儒学者にたどりつき、その綿密な読解法と内容の豊かさ、どこか楽しい思想同士のぶつかり合いを目の当たりにし、日本倫理思想史や儒教、荻生徂徠を研究対象として博士課程まで進学するに至りました。博論を執筆するにあたって、お茶の水女子大学大学院に進学し、単位取得退学という形で大学院を出たあと、荻生徂徠の思想について博論を執筆。母校その他の大学で非常勤講師や協力研究員を務めた後に、現職につきました。

さて、ここであらためて、学芸員資格について振り返っておきます。私が学芸員資格を取得したのは大学生の時です。大学で博物館に関する科目の単位を修得して卒業することで学芸員資格を得ました。この資格は他にも、取得単位を学芸員補としての実務歴でおぎなったり、学芸員資格認定試験／認定審査によっても取得したりすることができますが、現在学芸員職を考えている高校生や大学生は、ぜひ大学で資格を取得しておいてくだ

さい。ちなみに、当時私は、博物館実習に行きたくて博物館過程を履修していました。いつもはガラスの向こうにある資料や作品の数々に、つまり、眺めるだけの品々に直接かかわることができるという経験に惹かれてのことですが、資格を活用する日が来るとはまったく思っていなかった（これは専門職を希望する多くの方が直面する問題だと思いますが、とにかく求人が出ないと言われていたので）、現職に至ったことはタイミングに恵まれたのだらうと感じています。

学芸員になるということ強くイメージしていなかったわけですが、大学に届いた職員募集の案内に「学芸員（文学）」（勤務先は姫路文学館）が含まれていることを知り、その募集が定める年齢制限に自分がギリギリ含まれていることや、勤務先となる施設が主な展示対象としている人物に、倫理学者の和辻哲郎（姫路市仁豊野出身）や民俗学者の柳田國男（神崎郡福崎町出身）、哲学者の三木清（たつの市出身）といった、これまで自分が研究対象としてきた領域の学者たちが含まれているほか、ドイツ語学者の関口存男、歴史学者の三上参次や辻善之助も姫路出身であることを知り、これまで積み上げてきた経験と関心を活かせるのではないかと受検へと歩を進めました。

私が受験した時に課されたものは、一般的な地方公務員試験と専門試験、面接でしたが、学芸員になるための試験は各施設の運営の仕方によって様々です。博物館は、当館のように地方自治体による運営以外に、公益財団法人、一般財団法人、一般社団法人、宗教法人などによるものがあり、自治体の施設でも、指定管理者制度によってその運営を外部の民間法人や団体に委託しているケースが多くあります。学芸員になるための方法は、施設によってさまざまに異なりますので、勤務したいと希望する博物館・美術館・文学館がある方は事前に確認しておくようにしてください。

2. 学芸員の仕事 — 展示

学芸員の仕事は、大きく次のように整理することができます。

- ① 資料の収集・整理
- ② 資料の保管・保存
- ③ 資料の展示・活用
- ④ 資料の調査・研究
- ⑤ 教育普及活動
- ⑥ 市主催の事業も一和辻哲郎文化賞事務局

当館の場合、「資料」は和書や洋書の書籍を中心に、原稿や書簡などの直筆資料、遺品、掛軸や絵画などの美術品（直筆資料としての書、装画や挿絵の原画、作家のコレクションとしての美術品など）がありますが、これらに関する収集・整理（①）、保管・保存（②）、展示・活用（③）、調査・研究（④）、教育普及活動（⑤）、さらに姫路市が主催する文化賞の事務局業務（⑥）などが含まれます。

「収集・整理」①は、寄贈を受けたり、古書店から姫路にゆかりのある文学・歴史・文化に関係する資料を買ったりして、それらを収蔵品として整理します。「保管・保存」②では、資料を永く後世へと残すために、収蔵庫での管理を行います。収蔵庫に入れる前には、資料の殺虫・殺菌をするために燻蒸という作業（ガスによる殺虫・殺菌）を行い、その他にも収蔵庫内の温湿度の管理を行うことで資料の劣化を防ぎます。「展示・活用」③については後で詳細を取り上げるのでここでは省略します。「調査・研究」④は、収蔵資料についての情報を調べ、明らかにしていく作業です。最も初歩的なものだと、資料に名前をつけるところから始まります。その資料を、どういう名前呼び、いつ、誰が書き（あるいは誰に関連する）、どういった来歴のものなのか、さまざまな情報を収集します。収集の方法は色々です。基本的には書籍（先行研究）から情報を得ま

すが、遺族・知人などから聞き取り調査によって得られるもの（記憶）も重要です。「教育普及活動」(⑤)は、文学館が蓄積した情報を人々に開示・共有するための活動です。展示の解説を行ったり、依頼に応じて講座におもむいたり、高校生や大学生と共同のイベントを開いたり、地域や社会と密接にかかわります。⑥は、姫路市の行政課題に関わるものですが、特殊なので本日は省略いたします。この中から、本日は「展示・活用」(③)について、具体的に紹介いたします。

資料の展示・展覧会のための業務を以下の通りまとめてみましたが、たくさんあります。

- (1) 企画立案、予算の獲得
- (2) 展示構成（出品目録の作成、出品交渉（訪問）、借用申請、著作権処理、写真撮影（図録掲載・PR））
- (3) イベントの企画（実施運営）
- (4) 広報（後援依頼、広報誌、ポスター・チラシの作成、配布）
- (5) 図録作成（解説文の執筆、寄稿文の依頼）
- (6) 会場設営（展覧会場の図面作成、解説文の執筆、キャプション作成、パネル作成、設営）
- (7) 集荷と返却（日程調整、調書の作成）

なお当館には現在5名の学芸員がおりますが、1年に4～5つ開催する展覧会を、各学芸員がひとつずつ担当するという方法で分担し、1つの展示を1人の担当者が責任をもって仕上げるといようなかたちで取り組んでいます。業務の分担の仕方は施設ごとに異なっていて、展覧会ごとではなく業務ごとに分ける所もあるようですので、これは一例としてお聞きください。

まずは「企画立案」ですが、当館では早いもので3年前には展覧会の構想が立ちます。いったいどのような展示をしたいのか／するべきかを考えて決定します。その後、実現に向けて展覧会開催に必要な予算を明らかにするために、展示構成の

詳細を計画します。まずは出品交渉です。展示品のほとんどが自館の資料でないという事は多いです。そこで、展覧会を豊かで見ごたえのあるものにするために、必要な資料や作品を個人（遺族、コレクター等）や他の施設から借りる交渉を行います。資料や美術品の貸し借りは、施設同士・担当者同士の信頼の上で成立するので非常に緊張する仕事です。その後、申請・著作権の対応をし、必要に応じてPRや図録掲載のための写真撮影を行うこともあり、いよいよ詰めの作業にかかるといった感じで、展覧会の全体（趣旨・出品内容と総数・構成）を具体的に決めてゆきます。

さらに、展覧会をより多くの人に見てもらうために、イベントの企画も行います。私が経験したものと、記念講演会、サイン会やライブペイント（作家と直接交流する機会として）、朗読会（読む以外の方法で文学作品にアプローチ）、落語会（展覧会に密接した話題として）などを行ってきました。展覧会を見た人がイベントを楽しむことはもちろん、イベントをきっかけにして展覧会へ足を運ぶという人も多いので、会期中に開くイベントも展覧会の重要な要素です。また当館には素敵なカフェがありまして、会期中に展覧会コラボメニューを提供するという企画にご協力いただくこともあります。そして開幕に向けて広報活動に取り組み、展覧会のポスターやチラシなどの広報物をつくって配布したり、各種マスコミの取材に応えたり、広報誌にPR文を執筆したりして、情報を発信してゆきます。

図録を制作することもあります。展示した内容を記録に残し、広く長く伝えてゆく方法として、特に自主企画展示では力を注ぐ業務の一つです。展示担当者は、執筆から編集まで一手に引き受けます。限られた時間で推敲を重ねて1冊の本を作りますが、これも学芸員の重要な仕事です。

展示会場の設営にも携わります。計画した展覧会の全貌を、実際に会場へと落とし込む作業です。見る人にどのような順序（ストーリー）で見ても

raitaiかを考えながら、会場内のどこ（壁・ケース内）に何（資料・作品）を配置するのかを決め、図面を作成し、その完成予想図を展示作業の協力者と共有しながら展示空間を完成させます。

展示空間に欠かせないものとして、解説パネルやキャプション（個々の出品資料につける説明）もあります。文学館の主な展示資料は、本や原稿、作家の遺品などを中心に、多いときで400を超える場合もあります。それらすべての執筆（場合によってはデザインも）を学芸員が担当します。文学館のキャプションは美術館で見ると比べると圧倒的に文字量が多いかもしれません。（書きすぎるという点は、個人的に改善しなければならない課題ですが）必要な情報を厳選してまとめることのも重要な視点です。

そして、展覧会に関する特に重要な業務として、展示資料・作品の集荷と返却があります。展覧会を実施するにあたっては自館で収蔵していない資料を使うことも多いと説明しましたが、その時は借りに行かなければなりません。資料を借りることには非常に大きな責任が伴います。借用時は、資料のコンディションチェックを行います。借りた時のままをお返しするために、その時の状態を確認するわけです。一例を挙げれば、茶杓（茶道の道具のひとつ）をお借りした際は、割れ、キズ、木材の剥がれなどをつぶさに捉えながら記録を残し、複数名でその確認を行いました。資料・作品を理解し、大切に扱うことは、学芸業務における肝要な作業です。

以上が、展覧会開催にかかる主な業務ですが、これは、私たちが「自主企画展示」と呼ぶものの全体で、もうひとつ「巡回展」と呼ぶもの（すでにパッケージとして完成されたもので、全国各地を巡る展示）があります。巡回展では、出品資料や数、広報用デザインもある程度決まっています、パネルやキャプションも展示品と一緒に巡回しますので、業務量としては自主企画展示より緩やかになると言えますが、巡回展には巡回展の課題が

あります。それは、ある程度定まっている展示の規模を、自館の展示室の規模に合わせてリサイズするというものです。たとえば、出品数の調整や、章立ての入れ替えを行ったり、せっかく姫路文学館で開催するならばということで、展示内容に地域性ある話題を追加したりすることもあります。企画者が表現したいものを確認しながら、会場館として何ができるかを考えて提案することもありました。当館では、自主企画展示と巡回展を混ぜながら、業務がスムーズに進行するように年間のバランスを取っています。

以上、展覧会の実務について見渡しましたので、少しだけ内容についても紹介いたします。これは、文学作品の読みどころや思想、すなわち形のないものを表現しようとした試みの一例として、お聞きいただければと思います。

当然のことであるにもかかわらず、私が着任当初つまづいたのは〈展覧会の主役は、資料や作品そのものである〉ということでした。最初に学芸員の仕事を紹介した際に「資料の収集・整理」「資料の保管・保存」「資料の展示・活用」など、「資料」に関わるのが学芸員の仕事ですと伝えました。展覧会には〈もの〉、しかも見ごたえのあるもの（希少性、美しさ、情報の多さ、新しさなどで創出され得る、価値あるもの）がないと楽しくないです。しかし、私が文学館着任以前にしていたことと言えば論文を書くことで、私の場合それは図版はおろか表や図さえ取り入れたこともなく、引用文と考察文だけで成り立つような表現方法でした。それまで頼りとしていた引用文を、〈もの〉に置き換える必要があるという転換（引用文だけが並ぶパネル展は面白みに欠けますから）は、個人的には大きな模索でした。その意味で、私が最初に担当した企画展「収蔵品 金井寅之助文庫展 江戸文学コレクション」はあらゆることが挑戦で、手探りだったことをおぼえています。

(a) 企画展「収藏品 金井寅之助文庫展 江戸文学コレクション」(2018年1月6日～4月8日)

タイトルにある「金井寅之助文庫」は、姫路市出身の近世文学の研究者・金井寅之助氏の旧蔵資料をまとめて収蔵している、当館の特色あるコレクションのひとつです。地方に住む人がそこに居ながらにして研究に携わることができるようにという意図で集められたそのコレクションは、江戸時代に刊行された版本を多く収蔵し、思想・文学・歴史・科学・医学・地図・日記など、ジャンルを網羅するような蒐集ぶりでした。時代を眺めることさえ可能かもしれないその幅広さをコレクションの魅力として表現してみようと思ったのですが、出品資料を選び、開くページはどこにするのかなど課題はたくさんです。

この時に私が頼りとしたのが「挿絵」でした。金井氏が井原西鶴の文学研究を中心に行っていたということを出発点にしつつ、その中でも「読む」のではなく「見る」ということにこだわって展示内容を検討して、すがるような状態だったのですが、たとえば展示した挿絵のひとつに『西鶴織留』の一場面があります。それは、とある一家を襲った怪異を描いたもので、井戸や女が逆さまに印刷され、箒や燭台もひっくり返っており、男が屋敷から庭へばたりと投げ出されている様子も見る事ができました。ポルターガイストを描いたと分析されているその絵は、当時から解釈が困難であったようで、版を重ねるごとに挿絵に変化が生じ、逆さまの女の姿が消えたり、印刷ミスだと判断され、天地を正して(逆さまだった井戸や女が正位置に修正されて)改版されたりしたといったエピソードがありました。そういった情報を掘り出しながら、収蔵資料から江戸時代のベストセラーを選び出して挿絵の部分を開いて紹介したのですが、挿絵ばかりが並んでいても、これが意外と飽きてくるものです。そこで「閑話休題」というかたちで差しはさんだのが、文章だけでまとめられた料理本でした。たとえば『豆腐百珍』(現

代風に言えば「豆腐で作る100のレシピ」)は、シリーズ化して出版されたほどの当時の人気作です。イメージを得やすい文字と内容を頼りに緩急をつけつつ全体を構成し、なんとか会場に展示資料を並べました。が、どの資料も説明が多すぎた(必要としすぎた)という点において、反省の大きかった展示となりました。

(b) 特別展「没後50年 姫路が生んだ二人の作家 阿部知二と椎名麟三展」(2023年12月2日～2024年2月4日)

資料を出発点に展示を構成しようとする、〈もの〉が伝える情報は多々あることに気づきます。たとえば、「阿部知二と椎名麟三展」に出品した作家の直筆資料です。本展において、私は「椎名麟三」の展示を担当しました。姫路市生まれの第一次戦後派作家・椎名麟三のデビュー作「深夜の酒宴」には、その原題である「黒い運河」の原稿も含めると、4種類の直筆原稿/草稿が残っています。この4種類は、最初の1文(書き出し)を見比べるだけでも、作家自身の創作活動の軌跡を追うことができるような内容になっています。一人称で書くか三人称で書くか、主体性を押し出すか、客観的に描写するかなど、作家の試行錯誤の跡を見ることができるのです。直筆原稿で作家の創作のようすを知るという内容は、本展のひとつの見どころとなりました。そのほかにも、文字それ自体から得られる情報があります。椎名の草稿はB5ノートをタテ使いして書き綴られていました。その文字はとても小さいのですが、楷書で読みやすく、文章はノートの罫線を中心線にまっすぐ書かれています。この背景には、椎名がかつて出版社で筆耕の仕事をしていたという経験が控えています。すると、年表に書きこむだけになったかもしれない一つの履歴が、資料によって語られる内容として浮上してくるわけです。

(c) 特別展「生誕120年 文豪川端康成と美のコレクション展」(2019年9月14日～11月4日)

文字に対する想いを見ていただく展示もありました。姫路市立美術館との共同企画となった「川端康成と美のコレクション展」で、文学館会場には、川端が旧蔵していた書簡や書(掛軸や色紙)が一堂に会しました。その中には、よく知られたものだと、芥川賞受賞を願う太宰治からの手紙や、ノーベル文学賞受賞時に自宅にかけていたという北原白秋・若山牧水・尾崎紅葉が書いた掛軸、島木健作から届いた「迷惑をかけてごめんなさい」との詫び状を、川端が面白がって掛軸にしたというものもありました。これらは、それぞれにエピソードがあって、単独の資料として見ても楽しいものですが、それが「一堂に会する」ということの意味を示すと良いかもという視点から、川端康成が文字それ自体に人の魂や人格、人生を見、時にその筆の主を懐かしむ人であったということ、ひとつの見方として用意した展示となりました。川端康成に関する展示はこれまでに何度も行われ、そのたびに各館・各担当者によって翻訳(意味的に)されながら作家・作品のあじわいが紹介されてきました。答えを示すのではなく、時代性、解釈の多様性や奥行きを示しながら更新してゆくの、文学展の醍醐味と言えるでしょうか。

(d) 特別展「没後10年 西山松之助展 ある文人歴史家と江戸学の軌跡」(2022年9月23日～12月4日)

もうひとつご紹介したいのが「西山松之助展」です。『家元の研究』という大きな研究業績や、「江戸学」の火付け役として、西山松之助先生のお名前をご存じの方も多いと思います。本展は、没後10年の節目に開催した初めての大規模回顧展ということもあって、西山松之助の生涯をたどり、人となりや研究業績を伝え、研究と表裏一体となっていた趣味(絵画や茶杓制作)などを取り上

げることで、その人自身を知ってもらうことを目指した展示となりました。しかし、学者を展示するという事は非常に難しいことでした。展示内容に欠かすことができないのがその研究成果ですが、家元の研究、つまり芸道における師匠から弟子へ技術を継承してゆく仕組みを整理して示したというその内容には、形がありません。また、その話題だけでは内容が専門的すぎて、見る人が限られてしまいます。なにより、論文要旨を発表するような展示は、展示を見てくれる人にやさしくありません。そこで本展が氏の研究業績の紹介とあわせてもうひとつの柱としたのが、自作の工芸品や、みずから出演したという歌舞伎の記録の数々でした。各地に残された茶杓研究の過程で記録された実測調査図、そして自ら削ったたくさんの茶杓、さらには学者が歌舞伎役者となるという前代未聞の記録を写真や音声記録で展示することで、「文化そのものを直接観察し調査」したり、「無形文化は自分で演じたり行じたりしてみないと、本当の研究は出来ない」(『西山松之助著作集』刊行に際しての西山の言葉)と考える学者の理念を表現することを試みた内容となりました。

(e) 絵本原画展での立体作品

「見る」ということに効果的なのは、直筆資料や遺品など作家につながる一次資料だけではありません。たとえば、巨大ジオラマなどの造作演出があります。当館では、夏休みを中心に、絵本に関する展示をすることが多いです。それらの展示には、何よりもまず、原画を見ることのできる喜びや、ラフ画や作家自身の手になるダミー本を見ることで創作活動の一端を知るという楽しみがありますが、もうひとつの大きな見どころとなるのが、大掛かりな造作による立体展示です。その作品世界を立体的に再現した空間に身を置くことによって、没入感やイメージーションを掻き立てられるような、わくわくする感覚を体験できることは、皆さんにも経験があるのではないのでしょうか。

今後予想される展示の課題を少し加味しますと、現代はデジタル化によって直筆資料（これまで一次資料としてきたもの）が少なくなってきました。そういった課題に対して、ジオラマなどの造作や、プロジェクションマッピングなどを駆使した映像演出、空間デザインなどが、より大きな効果を発揮する方法として重視されるのではないかなと感じています。

以上、展示をする側からの失敗談やこだわりなどを紹介させていただきましたが、展示は見る人がそれぞれに楽しんでいただくのが第一です。多くの人に満足してもらうために、学芸員は様々な工夫を凝らし、色々な用意をしますけれども、まずは皆さん自身の見方と感性で味わっていただければと願っています。

3. 資料活用の課題 —デジタル・アーカイブ

資料の活用、とくにデジタル・アーカイブ業務について紹介させていただきます。文学資料のデジタル化は、現在、推進の大きな流れの中にあります。資料のデジタル化とその公開は、保存・管理という観点から、資料の劣化を防ぐ（遅らせる）ことで後世につないでゆく方法として有益であるというだけでなく、いつでも、どこでも閲覧できるという利便性向上のため、そして多くの人の調査研究に貢献するために推し進められています。当館では二つの方法でこの課題に取り組んでおり、①自分たちで地道に撮影（スキャン）してデータ化するか、②外部の機関に協力を仰ぐか、です。当館では近年、国文学研究資料館が進めている「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画（略称：歴史的典籍NW事業）」へ収蔵資料をお預けすることで、江戸・明治・大正時代の貴重資料を中心に資料のデータ化を進めています。

ただし、著作権や個人情報保護の観点から、近

現代資料については、利便性・有益性だけをたよりにデータ化し公開することはできません。関係者への配慮も欠いてはならないというのが、データ化作業をするうえでの極めて重要な課題と言えます。

4. マルチタスクの日々

学芸員の仕事は展覧会に関係することだけではありません。最後に、その他の業務を紹介しながらそれを補いたいと思います。

展覧会以外で、各種イベントを催すこともあります。たとえば、作家の顕彰を企図して司馬遼太郎の誕生日に開催する講演会「司馬遼太郎メモリアル・デー」や、こどもを対象とした夏休みのワークショップ「世界にひとつの絵本づくり」、文学的創作活動を盛り上げて書くことの大切さを伝える「エッセイコンクール」、中高生・大学生の学外活動のサポートをしたり、播磨にゆかりの作家をまねいて講演会を開催したりする「KOTOBAまつり」などがあり、それらの企画・運営も行います。また、お聞きくださっている皆さんといつかご一緒することがあるかもしれませんが、博物館実習の受け入れや、中学生の職場体験（トライ・やるウィーク）へも協力します。

そして、展示装置システムの管理・各種照明演出のほか、当館ですと、タッチパネル式の展示用端末やプロジェクションマッピングなどを利用していますが、その不具合や故障に随時対応します。展覧会の実施報告や、研究報告などに関わる執筆活動もあり、館報（「手帖 姫路文学館」）や年報、研究紀要の発行も毎年の業務として行います。社会貢献の一環として、出前講座の実施や展示見学対応（団体ガイド）を行うほか、市民との連携としてボランティア活動のサポートを行うことも、日々の業務のひとつです。

さらに、行政課題に関わるものとして、姫路市が主催する「和辻哲郎文化賞」の事務局業務も担

います。展覧会だけではない、マルチタスクの
日々が学芸員業務の特徴であり、難しさとも言え
るでしょうか。

最後に、当館の甲斐史子副館長から良い言葉を
預かったので紹介させてください。「学芸員とは
何か」という問いに対して、「学芸員とは研究者
であり、教育者であり、職人であり、サービスマ
ンであり、伝達者でもある。」と伝えてしてくれま
した。多くの顔を持ち、役割を果たすのが学芸員だ
ということですが、言いかえれば、さまざまな方
法でこの職に関わることができるということでも
あります。いざ学芸員になればマルチな活躍が期
待されるわけですが、いずれかひとつでも皆さん
の得意な技を博物館施設で活かしたいと思えば、
学芸員への道は開けてくると思いますので、ぜひ
将来の選択肢のひとつに「文学館学芸員」を加え
ていただけると嬉しいです。本日はお聞きくださ
りありがとうございました。